

日本文學全集

第五編目次

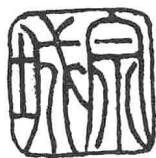
中務内侍日記

讃岐典侍日記

和泉式部日記

蜻蛉日記

明治庚寅秋日
伴達宗城題



明治二十三年七月二十九日
 明治二十三年七月二十二日
 明治二十二年十月二日
 明治二十四年五月二十日
 大正元年十月二十日



發兌元

博文館

東京市日本橋區本町三丁目

文學全書(第五)

正價金參拾錢

八橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

水谷景長

東京市小石川區久堅町百〇八番地

博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

中務内侍日記

解題

中務内侍は、宮内卿永經卿の女にて、その傳詳ならねど、龜山、後宇多、の兩朝より、伏見天皇の御代かけて、仕へまつりしがごとし。

この日記は、故後深草院天皇を忍ひ奉ることより、書きはじめて、伏見天皇の正應五年までの間、おのが禁中にありて、所々の御幸などに、供奉せし時のさまなど、限なく記せり。中にも、伏見天皇御即位の次第、及び大嘗會の事をかけるは、いと珍し。

そもく、當時は、鎌倉の執權、政申せる頃にて、朝廷はいたく衰へさせたまひ、固有の大禮さへ、勸慮のまゝならぬが多かりしことは、史家の常に慨くところなり。今この日記を見るに、その御即位のさま、微々たりとはいへ、猶舊體を存し、大嘗會の如きも、その式こそ古のまゝならね。かつかつ行はれたることの知らるゝは、えがたき賜ならずや。

文体は、古の女流の日記をならへりに見ゆれど、詞つきや稍新しく、部式部日記なとに比べては、大に讀みやすかるは、今を距ること、程遠からねばなり。

この書、扶桑拾葉集に納めたる、群書類従なるとの外、いまだ善本見あたらす。さればえ解せぬ事ところ／＼にあれど、強ひて説をなさず。もとのまゝに従へり。

制して保平の乱に胚胎し相家頼衰
朝廷の威權行はれ慨き事の極ありしかば
の口記も崩御踐祚の現状^{アカサマ}目^ミあ^ミえ奉る
心地も中務内侍口記は一き期^{ヘタテ}得て有べきを
の書即西暦才十三を以て初めたり秋の末
を初とせば頃時源氏遷山はす高伏見
五帝の正世より保平鎌倉の源氏曾内

相倉信正と今と挑承への変大義名分の
地に墜より王家の式微をせり而れども
びの日記を以即位大書といふの儀式の嚴重
に承りし事とある知るありされと於
和泉の文を假して乃妙なる横波中務の事
を以てある安もるは時世に依りて見られ
事をもとて當昔の人の言語事の現状を言

又一跋みかく寫真画ヤツシはままにまゝとりて

後の世に傳へたるに實に史の闕を補ふ可き蹟

あれど大凡に狂言侍様とのと若色とまをれ

は、いけの雲のともなひ當時は少ゆき禁や都

戸勢大輔未深ゆつを始女流に又孝の洞キコエ

高き人ありと祢々又登るゝに地たり

其の世の汰を考ふるに男子と雷井の書りや

メデモシア

漢耽て一向に漢文の^{メデモシア}を既つ漢文

今も推通て男女老幼の^{メデモシア}事々として

取ら便忍きを^{メデモシア}相^{メデモシア}交^{メデモシア}するに

國の^{メデモシア}文と女^{メデモシア}文と事々として^{メデモシア}腐^{メデモシア}して

厭^{メデモシア}きより雅に^{メデモシア}趣^{メデモシア}き^{メデモシア}記^{メデモシア}風^{メデモシア}土^{メデモシア}記^{メデモシア}祝^{メデモシア}詞^{メデモシア}

宜^{メデモシア}余^{メデモシア}書^{メデモシア}の^{メデモシア}文^{メデモシア}作^{メデモシア}の^{メデモシア}廢^{メデモシア}は^{メデモシア}つる^{メデモシア}も^{メデモシア}に^{メデモシア}皇^{メデモシア}帝^{メデモシア}

の^{メデモシア}積^{メデモシア}威^{メデモシア}も^{メデモシア}た^{メデモシア}き^{メデモシア}世^{メデモシア}と^{メデモシア}ま^{メデモシア}に^{メデモシア}く^{メデモシア}散^{メデモシア}れ^{メデモシア}り^{メデモシア}あ^{メデモシア}じ

女流のまゝかに淳良なる性ありと平生の言はく

いふなり―事柄をきいて已に既弄とあ

まのふりていふ事―の日記を文章の模範と

まゐる者なり―高節の文章を模範

の國の言はくを模範と大日本國の風俗を以て

たふしむ何れなりけむと云ふ者なり

いふと福屋主人に樂なり
男丸山正孝

中務内侍日記

小中村義象

落合直文校

萩野由之

末の露云々新古今
 僧正遍昭の歌
 に末の露本の雪
 や世の中のおく
 しなきたつため
 なるらんとか
 る歌に據れり
 得達の縁に得脱
 にて達は脱の字
 の義なるを音通
 にてかけるなり
 煩悩を脱して菩
 提を得るといふ
 ことにて佛縁の
 ことをいふなり
 院の御方後深草
 院を申す
 春宮伏見院天皇
 なり

徒に、明し暮す春秋は、たい羊の歩みなる心地して、末の露、本の雪に、後
 れ先だつ例の、はかなき世を、且思ひながらも得達の縁には進まず、皆
 生々世々に、迷ひぬべき人間の、八苦なるぞあさましき。唯かゝる世の、
 そゝろごとのみ、心に玄みて、忘れ難き中にも、弘安三年、伏見殿の御織法
 とて、院の御方はなくなりしに、十五夜の月も、雪打ち散りて、風も冷々
 かなる、枯野の庭の氣色物あはれなれど、同じ心に見る人もなし。獨眺め
 んも、好きくしかりぬへければ、入りて伏しぬるに、春宮御方、釣殿に出
 でさせおはします。御供左衛門の督の殿、内侍殿、男には、左中將ばかり
 參る。宰相殿、宮内三人、寝ぬるを、御所になりぬるとて、あれば、皆起き

權太夫具守なり

壺中庭やうの所
を云ふ

よろづに氣近き
云々總て枯れ伏
したる庭の中に
軒端の吳竹のみ
雪折れながら人
氣近く立てり
なり
艶たちてたちて
はめきてといは
んが如し色氣め
くを云ふ

て參る、すさまじき物とかや、いひふるすなる。十二月しはすの月夜なれど、宮の中は、皆白妙しろたへに見えわたりて、木々の梢は、花と見ゆ。池の鏡もされたるに、枯蘆の、はかなく萎れ伏したるほど、よろづに見所みどころあり。音なく靜りたるに、絶えぐ岩に漏るゝ水の音ばかりして、軒端のきはの松のみぞ、つれなく見ゆる。權太夫伺候したるほどなるに御使あり。常盤井殿の御參り、とばかり答へて、局には、小さき童わらべばかりぞある。いと念なく、初雪の心地して、など申す。女院の御方も、御留守るすなり。御壺御覽らんせらる。軒近く一むら生ひたる吳竹くれたけの雪折をれしたるも。なべて枯れぬる草よりもはかなく、よろづに氣けちかきさまに、見所添ひてぞ侍る。又女房の局ども、いまだ寢ぬ所もあり、いと艶えんだちて、をかしき事ども多し。猶立ち還り、ありつる方を御覽せらるれば、すこし晴れつる空も、又かきくらし、風も勵さえしく、冴やめたるに、寡鳥やめからすの一聲も、あはれをそへて覺ゆる。
ながめ侘わび心もそらにかきくれて降る白ゆきにすむつきのかけ

猶端を明けて云々
 暫の程縁の端々
 の簾などかき上
 けて物悲しく空
 ななめ居る体
 なり

たそかれ夕くれ
 の程をいふ

うきふしを思ひみだれてはかなきはみぎはの蘆の雪のしたをれ
 かくて入らせ給ひぬれば、御留守の御所に寝ぬれども、暫しばしは、猶端はしを明けて
 晴れ曇る空を眺めて、何となく物語どもするに、時移り鳥もしばく鳴
 くに、又あはれを添ふる鐘の音も、枕に近き心ちして、いと哀に物悲し。
 我ならで鳥もなきけり音ねをそへて明け行く鐘のさゆるひゞきに
 たゞ心の中ばかり、つゝかぬ事のみ按せらるゝも、我ながらをかし。
 又弘安三年のとし、御さかき出てさせ給ひしかば、廂の御所なりしに、四
 年の八月十六日、たそがれの程より、かきくれて降る雨の、更くるまゝに
 名残なく晴れて、同じ空とも見えぬ月影、面白ければ、春宮の御方、入らせ
 おはしまして、御月見あり。霧降りてをかしきに、猶曇らぬ露の光、聲々
 に鳴く蟲の音も、取り集めたる心ちして、吹き迷ひたる風に、亂れまさる
 露の玉も、心苦しきに、松にかゝる光は、異なるも、如意寶珠の玉かと思え
 けん。嵯峨野もこれには過ぎじと覺えて、

院の御方龜山院
の御事なるべし
南殿ナデンと訓
むべし紫宸殿の
事なり

きりこめて霧の
さかりに立ちふ
いふ

御よるの後夜御
殿とて御寝間に
入らせ給ひても
急に寝つかれさ
せ玉にすとなり
初音待つ杜鵑の
初音を待つなり

よそふる人も云
々花橋の薫り合
ひたる空に杜鵑
の一聲はのかに
鳴きたるは昔の
人も思ひよそへ
られてなつかし
き心地すとなり

おのづから老ばしも消えぬたのみかは軒端の松にかゝるゑら露

御方々に入らせ給ひぬ。曉近くなるほどに、院の御方は、又南殿の月を御
覧せらるゝ。宵よりは、こようなう霧も降り増りて、木々の梢も見え分か
ず、霞める雪に、雁鳴き渡りて、あはれも添ひて面白ければ、

きりこめて哀もふかき秋の夜にくも井のかりも鳴きわたるかな

御よるの後も、とみに寝られず。

よなくはねぬよの友とながむるに霧なへだてそあきの夜の月

又弘安五年四月十七日、嵯峨殿の御留守なりしに、雨もを止まず、窓さへ
閉ぢて、日數積る頃、公私初音を待つ慰めばかりに、雨夜の空を御覧せら
るゝ。御供に三位殿、御局、大納言殿、別當殿、男には、綾の小路の三位、土

御門の少將、そゝろ事ども申して、をかしく、興ある事どもなり。心盡し
に待ちあかしつゝ郭公はそれかと、おぼめくほどの一聲に、花橋の薫りな
づかしきも、よそふる人もあり顔の心ちして、光なき夜の暗のうつゝも、

思ひなす方は、いづれも淺からねば、なかくなる忘形わすれがた見に、今も盡させざりけり。

時鳥おぼめくほどのひとこゑになごりのそらもむつまじきかな

世に經れば、何となく忘れぬふし／＼も多く、袖も濕れぬべきことわりも知らるゝこそ、かはゆく覺ゆれと、ことに弘安六年四月十九日、例の嵯峨殿の御幸かうなりて還御なる。御夜の後、春宮の御方、土御門の少將ばかり御供にて、院の御方さまに、忍びて御覽せらるゝ。南殿の花橋、盛なる頃なれば、香をなづかしむ時鳥もやと、待たせおはしますに、心盡しの一聲も、飽かず恨めし。その頃左中將何事にかありけん。籠りて久しく參らざりけるに、有明の空に鳴きぬる一聲を、寢覺にや聽くらんなど、かたじけなくも、思し出づるは、夢の中にも通ふらんをと、思ひ遣らるゝに、

思ひやるねざめやいかにほと／＼ぎす鳴きて過ぎぬるあり明の空と、御氣色あれば、内侍殿、たど／＼しきほどの有明の光に書きて、花橋に

たとくしげ云々未だよくも明け放れざる曉の光に有明の月の光にその歌をかきて花橋の枝に結び付けて左中將のものへと送られしなり

付けられたり。さるべき御使もなくて、明けぬべければ、土御門少將、人も供せず、たゞ一人馬にて行きぬ。手づから馬の口を引きて、門を叩くに、とみにも明けず。空は明け方になるも、あさましくをかし。門を明けぬるに、思ひ寄らず、あきれ立ちけんも、ことわりなり。さらぬ情だに折柄物は嬉しきに、かしこき御情も深く、色をも香をもと、思しめし出づるも、御使の嬉しさは、げに如何なりけん。同じたぐひならん身は、げにかでか、美しからん。ありがたき面目、生ける身の思ひ出とぞよそに思ひ知られて侍りし。ほのくと明くるほどにぞ、還り参りたる。

宮のうち鳴きて過ぎけるほととぎす待つ宿からは今もつれなし
この日土御門少將に、

宮の中云々左申
將の返歌なり歌
の意は大宮にこ
そ鳴け我待つ宿
には今だもなか
すとなり

あしひきの 山ほととぎす しひてなほ 待つはつれなく
更くる夜に とばかりたぐく 眞木の戸は あらぬ水雞と
まがへても さすがに明けて 尋ねれば 繁き草葉の

御使の貴くかし
こきとをいふな
り

つゆはらひ 分け入る人の すがたさへ 思ひもよらぬ
をりにしも いともかしこき なさけとて 傳へ述べつる
ことの葉を 我身にあまる 心ちして げに世にまらぬ
ありあけの 月にとゝむる おもかげの なごりまでこそ
忘れかねぬれ。

言の葉にいかにいひてもかひぞなきあらはれぬべき心ならねば
返事に少將

久かたの 月のかつらの かげにしも 時しもあれど
ほとゝぎす 一こゑなる ありあけの 月毛の駒こまに
まかせつゝ いともかしこき 玉づさを ひとりある庭の
まるべにて たつねしやどの 草ふかみ ふかきなさを
つたへしに たもとにあまる 嬉しさは よそまでもげに
まらくもの 絶えまにひかげ ほのめきて 朝おくつゆの